

一般開放制限  
アメリカ東海岸時間  
2001年10月18日午後2:00

連絡先：ジンジャー・ピンホルスター  
電話番号：202-326-6421  
gpinhols@aaas.org

最古のキツネザルの歯を発掘  
現在の生存地から遙か離れたパキスタンで。「サイエンス」誌に報告

パキスタンのブグティヒルズで、最古のキツネザルの歯を含む一握りの小さな化石が発掘された。この発見は、国際共同研究チームによって、「サイエンス」誌の10月19日号に発表される。

今回の発見はまた謎含みのものともいえる。というのはキツネザルは、サルや類人猿と同じ霊長類の仲間で、下顎から突き出した櫛状の歯を特徴とするのだが、現在はマダガスカル島にしか生息しない。これまで、科学者達は、キツネザルの原産地をアフリカだと考えてきたが、この新発見でアジア原産の可能性も考えねばならないかもしれない。

同論文の著者の1人である、フランスモンペリエ大学のローラン・マリボー氏は、インド亜大陸でキツネザルの化石が発見されたことについて、「全く予想してなかった」と述べている。

このブグティレムール マセソニ (Bugtilemur maehesoni) と呼ばれる3千万年前に出現したキツネザルは、キツネザルとその近縁のロリス科から成る strepsirrhine 霊長類の進化について、非常に希な手がかりを提供している。strepsirrhine は非常に多様なグループであるが、事実上、キツネザルの化石が発見されていなかったため、マダガスカル島に生息する以前のことは、古生物学的には空白状態となっている。

モンテペリエ大学のマリボー氏とジャンジャック・イェーガー氏、および共同研究者らは、ブグティレムールが霊長類の系統樹のどこに属するかを明らかにする目的で、歯の解剖学的特徴を解析した。そして、マダガスカル島に現存する小型のキツネザルの一種、コビトキツネザルと最も近い関係にあると結論づけた。ブグティレムールとコビトキツネザルは共に特殊化した歯の構造を持ち、他の小型のキツネザルやネズミキツネザルを含む現存のキツネザルとは異なっている。

この近縁関係は、霊長類の研究者らに問題を提起した。現在得られている証拠からは、マダガスカル島とインド亜大陸は約8千8百万年前に分離したことが示唆されており、これは、おそらくすべてのキツネザルの起源（約6千2百万年前）よりもかなり前のことである。また、コビトキツネザルのような特殊なキツネザルが現れるのはさらに後（約4千6百万年〜3千7百万年前）のことである。

このことから、原始キツネザルの何種類かの移動は2つの陸地の分離が起きた後であった可能性が示唆される。しかし、この説は、さらなる難問を含んでいる。一体、どちらからどちらへの移動があったのだろうか？答えは、どちらで最初にキツネザルが進化したか、ということによるだろう。これまでの研究では、アフリカがキツネザルとロリス科の原産地であり、キツネザルは後に、海洋に浮いている植物をいかだのようにして、

それに乗って東に向かい、現存地のマダガスカル島へ移動したと考えられている。しかし、このようなごく初期において、はっきりとそれとわかる、ブグティレムールのような特殊化したキツネザルが存在したということから、その起源はもともとアジアだったのではないかという可能性が生まれてくる。

サルや類人猿の祖先である真猿類を含む、その他いくつかの新しい霊長類の歯が、ブグティレムールと共に、ブグティヒルズで発掘されている。「サイエンス」誌の研究の著者らによれば、これらの発見は、最近の中国やミャンマー、タイにおける真猿類の発見と並んで、アジアが霊長類の起源の主な中心地であったのではないかという、新たな興味をかき立てるものである。

マリボー氏は、「アジア説にもっと注意を向ける時期がきている。しかし、この謎についての古生物学的解決は、まだ先になるだろう。」と述べている。

ブグティレムールは、他の水生や陸生の化石も発掘されるような場所で発見された。これらの木の一部や、花粉、果実の化石は、ブグティレムールが、おそらく、現在の熱帯林と似た環境に生息していたということを示している。

また、近くで、バルキテリウムの骨が同研究者らによって発見されているのだが、これも、以前は木が茂った場所であったという証拠になる。バルキテリウムは、地球上に生息した最大の哺乳類で、20トン近くの体重があった。

マリボー氏は、「この、驚くべき動物は、おそらく、1日に1トン以上の葉や他の食物を摂取していたと考えられ、同じ先史時代の自然環境を、小さなブグティレムールと共有していたのです」と述べている。

同氏によれば、過去7年間にわたってブグティヒルズでの古生物学的調査が行われてきたが、今後の現地調査は、最近のアメリカにおけるテロ事件によって延期されている。

「現在のところ、我々は、完全にテロ事件の影響を受けてしまっているが、これらの胸躍るような発見について、パキスタンの共同研究者らと活発な調査を続けていきたい」

###

研究チームの他のメンバーは、モンペリエ大学のジョン・ループ・ウエルカム、グレクアール・メテ、ステファン・ドゥクロック、パキスタンケッタ市パロキスタン大学のイブラハム・M. バロック、フランスパリ市国立自然史博物館ピエール・オリビエ・アントワン、メキシコ国立自治大学のムルド・ベナーミ、タイバンコク市鉱物資源局ヤオワック・チャイマニである。この研究の一部は、モンペリエ大学、フランス国立自然史博物館、ザ・フィセン、リーキー、ウェンナー・グレン、シンガー-ポリニャック、ブラースタイン-ブランチェ、トレイユ 基金によって援助されている。